

京都帝國大學 經濟學部 內
東亞經濟研究所

年四回（二月、五月、八月、十一月）發行

東亞經濟論叢

第四卷 第一號

昭和十九年九月二十日

支那インフレーションと其の對策……………谷口吉彦

唐の天寶時代に於ける河西道邊防軍の衣糧給與に就きて……………那波利貞

近世初期に於ける東亞貿易……………金田近二

支那奥地産鹽技術の技術史的地位……………島恭彦

支那貨幣小史……………穗積文雄

孫文の民生主義……………出口勇藏

（禁轉載）

書肆 有斐閣 發賣

孫文の民生主義（二）

出口勇藏

われわれは孫文の民生主義の本質を發展史的に二つの部分に區分して論じ、しかも恒に孫文の革命意欲の決斷の成果として明かにすべく試みて來た〔註〕。前後二期を通じて見られる民生主義論の結論を以下に引出しておか
うと思ふ。

〔註〕 民生主義の前期については、本誌前號の拙稿の前言で斷わつておいたやうに、「東亞人文學報」誌第二卷第一號の拙稿「民生主義の解明」で愚見の骨すじを示してをり、本誌前號の拙稿は後期の民生主義の分析である。

われわれの分析の結果を要約してのべると次のやうになるであらう。民生主義とは、形式的に云へば、中國民族を他の先進的な諸民族國家に對して近代國家にまで形成しようとした孫文の革命意欲の下に決斷せられた、中國における國民經濟政策一般を意味する。内容的に云へば、それはヘンリー・ジョージの單稅論とビスマルク的な資本主義發展政策と社會政策とによつて觸發せられ、それらを中國の地に模倣すべく意圖されたのであつて、その成立に當つては、傳統的な中國社會の構造や社會思想を顧慮すること全くなしに、構想せられた。孫文は、近

代的な民生主義の合言葉「自由・平等・博愛」が孫文の構想の實現に對して惜しみなく援助を與へて、中國をして近代國家たらしめるとともに、近世社會個有の社會問題の發生を、中國においては、豫防しうることを期待し、「第一の産業革命」と「第二の産業革命」とが同時に遂行されることによつて、中國民族の近代的な國家においては、社會進化の理論が主張するやうに、内に社會問題の發生を見ず、外に列強の侵略を受けず、國際社會は實際的な民生主義體制を如實に實現しうるはずである、と夢みたのである。この社會は所謂大同世界の科學的な把握に外ならない、と彼は考へた。さうして前期の民生主義のクライマックスを示す『物質建設』はこの夢を描く中國國民經濟建設の計畫書であつた。しかるに中國の社會構成と經濟事情との分析の甚だしい缺乏と、近世國家そのものに本質的な内部的ならびに對外的な矛盾と鬭争とに對する認識の不足とは、中國民族の國家形成をば、内部から、また帝國主義的列強の干渉や侵略のために、彼が期待したやうには、成就せしめなかつた。歐洲大戰後、列強が中國に對してますます虎視眈々として、表面では民族の獨立を援助するかのやうに見せかけながら、裏面では毒牙を磨き、ヨーロッパのアジア侵略の意圖を完成しようとするのを見せつけられたとき、また労働黨の政府すらが資本主義的利益を擁護する者以外の何ものでもないことが判つた時〔註〕、彼の革命意慾は絶望の淵に投げ落とされたのである。孫文の東洋人的自覺は、列強の裏切りに逢ふ度に、ますます強化されて行つた。彼は歐洲文化が「物の文化」であり、それが人類に適用せられると、武力文化となり覇道となるに對し、東洋文化が仁義道德を基礎とする「心の文化」であり、王道となるものである、と述べる程度にまで進んだ（千九百二十四年十二月『大アジア主義』邦譯「孫文全集」第三卷、二〇七頁以下）。けれども「心の文化」から出て「物の文化」を包

み取り、新しい文化のかたちに目覺め、それを創造することによつてヨーロッパ文化に對抗し、以つて眞の民族的解放と獨立とを圖るには、彼の知性は狭小であり、ヨーロッパ的近世の思想の表面的な理解はそれを妨げもした。一般に中國革命は、類型的に云へば、上からの (von oben) 革命でもなく、また下からの (von unten) の革命でもなく、横からの (von seiten) 革命として特色づけることができると思はれるのであるが、革命の指導理論が先進ヨーロッパ諸國の社會思想から借りられたが故に、民生主義は中國においてはじめて近代的革命理論の一部となりえたのではあつたが、革命の客體的條件が分析せられてもゐず、また革命の主體がその理論を以て實踐しうるだけ成熟してもゐなかつたがために、民生主義は結局、近代的な知識をまとふた中國人孫文の白中夢であつたのである。

〔註〕 千九百二十四年八月に廣東で起つた「商團事件」の背後に英國の労働黨内閣の手が動いてゐることを知つたとき、孫文は社會主義の假面の裏にも帝國主義が毒牙をみがいてゐることを知つたのである。彼はマクドナルド政府に抗議の電文を發して、その不當を彈劾した(『増補中山叢書』第四卷。邦譯の『孫文全集』にはこの電文は譯載されてゐない。)

だから、ロシア革命をば最初のうちは中國革命の後輩としか考へなかつた孫文は、コミンテルンの自己宣傳と從來の外交條約——それは帝制ロシアの中國侵略の指標であつた——の破棄と云ふ好餌に釣られて、急轉換して革命戰術をソヴェトに學ばうともしたのである。しかし之ととも、マルクスレーニン主義の適確な理論的把握の上で、その中國への適用を熟考してからではなく、その由つて立つ唯物史觀に對してはウリアムのブルヂョフ民生主義的理論を以て批判しようとしたほどに、彼の立場は以前と變りはしなかつたことを示してゐるの

1) この點については、拙稿「中國國民革命の性格について」(經濟論叢, 昭和十九年一月號, 高田博士還曆紀念論文集所收)を參照。

である。

孫文の理論的基準は、このやうに、ブルジョワ民主主義とプロレタリア民主主義との兩極を行きつ戻りつ浮動して、遂に落付くところがなかつた。併しながらこの理論的動搖は、單に孫文に個有なものであつたのではなくして、ヨーロッパの社會思想史においても見ることが出来るものなのである。それは啓蒙時代の、とくにフランス革命當時の社會思想である。人々は舊制度を打破して理性的な社會秩序、いはゆる「自然秩序」の實現に氣負つたのであつたが、その社會秩序は、内容的に見れば、ブルジョワ民主主義とプロレタリア民主主義との間を動搖してゐたのである〔註〕。孫文の民生主義の場合にも、この啓蒙時代に特徴的な思想的動搖が現れてゐるのであつて、ここに彼が中國社會に對する啓蒙期的な役割を果たしたと云ふ歴史的意義があることを觀破しなくてはならないのである。民生主義は中國における啓蒙期的な社會經濟思想である。

〔註〕 わたくしはフランス啓蒙時代のこの思想的動搖について、とくにロンドルセの社會意識に關して、若干の分析を加へたことがある。拙著『經濟學と歴史意識』二四四頁以下參照。

しかしながら、ヨーロッパの啓蒙時代のこの社會意識の動搖だけで、われわれは民生主義における孫文の動搖の全貌を説明することはできない。ヨーロッパの場合では、その動搖は理性的な個人のヒューマニズムに根據を求めてよいと思はれるけれども、孫文の場合では、この根據もなくはないとは云へ、本質的にこの動搖を孫文の實踐的な社會意識の底で安定せしめてゐたものが、ヨーロッパの近代人とは別個にあつたのである。さうしてここに中國における近代人、孫文の思想の中核が横はつてゐるのである。それをわたくしは東洋人的心術と名づけた

いと思ふ。すなはち東洋人的心術を有つた近代的な中國人、孫文の主觀においては、東洋人的心術はその上に上記の理論的動搖をば載せつつ、それらが安定してゐるかのやうに考へたのである。また動搖の客觀的要素であるヨーロッパ近世において典型的なブルジョワジーとプロレタリアートとが、中國においては非實在的なものであつただけに、それらの間の階級闘争が中國においてはいまだ現實的ではなかつた。この客觀的條件から云つても、理論的動搖は孫文に自覺されることがなかつたのである。このやうな孫文の理論的意識を特徴づけるために、わたくしは漢、魏、洋才と云ふ語を以てしたいと思ふのである。そこで、孫文の民生主義は、資本主義と社會主義との漢、魏、洋才的な攝取の上に成り立つところの國民經濟建設のための諸政策である、と一言にして言ひ盡せるであらう。孫文は『物質建設』の結論において「要するに、資本主義と社會主義と云ふ人類進化の二つの經濟力が相並んで未來の文明において協力するに至るやうに、中國において資本主義をして社會主義を創造せしめることが、余の考へである」と語つたが「註」この言葉は、上記のやうに彼の意識を解するとき、その具體的な内容を露はにすると思はれる。

【註】 余のために孫文の筆に成る英語の原文を引くは—— In a nutshell, it is my idea to make capitalism create socialism in China so that two economic forces of human evolution will work side by side in future civilization. (Sun Yat Sen, The International Development of China, p. 2. 邦譯「前掲全集」第二卷「四二二頁」)

二

しからは孫文の漢魏洋才的な立場の内容とはいかなるものか。それは民生主義思想にどのやうな特色を興へ

たか。このやうなことに關して少し詳細な分析を加へておかう。

先づ彼の漢魂の本質を見究めよう。先に述べたやうに、彼にも中華思想と云はるべきものが本來横はつてゐた。さうして、歐米帝國主義列強の攻勢に直面したとき、それを越えて、東洋人的自覺が彼の意識の内部に高まつて行つた。その意味で、彼の意識の自覺面には漢魂を越えた東魂と云はれてよいものがあつた、と云はれるかも知れない。いづれが正しいかは、われわれの分析の結果が直ぐ示すであらうが、とにかく彼の東洋人的自覺の内容を傳へてゐるものが「日本は廢約運動に援助すべし」(千九百二十四年十一月)および有名な「大亞細亞主義」(同年十二月)の二つの講演である。これらは我國の中國との不平等條約の撤廢が中日兩國の東洋人的聯繫を可能にし、共にヨーロッパに對して東洋文化を自衛しうる所以であることを主張したものである。彼は日本に警告を發して云つた「今後日本が世界の文化に對し西洋霸道の犬となるか或は東洋王道の干城となるか、それは日本國民の慎重に考慮すべきことである」と(第三卷、二二七頁)。我國が現在大東亞の建設にあつて、この警告に對して何を以て應へてゐるかは、世界の知るところであつて、之について詳しく論ずることはわれわれの今の問題ではない。ここでは、上のやうに日本に警告を發し、中日の聯繫を主張する孫文の意識においては、日本と中國とがいかなる關係に置かれてゐたのか、と云ふことを検討することが必要なのである。

既に同盟會の「黨綱六條」(千九百五年)の第五條には「中日兩國國民の聯合を主張す」とあつて、孫文の革命運動に對する日本の志士の獻身的な援助は、たとへ直接には辛亥革命の成功に與からなかつたとは云へ、それなくしては革命運動の存續が不可能となるほどの有力な意義を有つてゐたことは、ここで述べるまでもないであらう。

また『中國存亡問題』(千九百十七年)の中では、中國と日本との關係が、米國との聯關において述べられてゐた。そこでは中日兩國が同文同種であるにとどまらず、存亡兩つながら相關聯する兄弟の國であると云はれてゐた。併しながら、孫文においては、中國が兄であり、日本が弟であると云ふ關係は、終始變りなく確信されてゐたのである。このことを明瞭に認識しておかなくてはならない。彼によると、日本の國家や文化は、その發展を支那文化に負つてゐるのであつた。さうして明治維新の變革に對しては、彼は次のやうに考へてゐた。

「或は謂ふであらう、日本の維新の業は全く陽明學の功である。東邦の人士は咸それを信じ『然り』となしてゐるので、王陽明を尊敬・推稱すること極めて大なのである、と。ところが日本は維新以前においてはまた封建時代であつて、その風俗は昔と格別變つたところもなく、朝氣がまだ残つてゐた。たまたま外患とその壓迫とが迫つて來たのに幕府が無爲無策であつたので、有志の人々は義憤を興して、尊王攘夷の説と云ふものを唱へて、國民を鼓舞したのである。此運動は義和團が扶清滅洋を唱へたのと歩調を一にするものであつた。違つてゐた點は時勢がよかつたかよくなかつたか云ふだけのことである。日本は攘夷論が成功せぬと見るや、轉じて西洋を師とした。そこで日本の維新の事業は全く西洋を師としたことによつて成就したのである」(第二卷、九八頁。傍點は引用者)

この考察は明治維新論として正しいであらうか。詳細に論ずるまでもなく、それは明治維新の最も重要な本質的契機をば全く見落してゐる抽象的なとらへ方である、と評するの外はないのである。たしかに攘夷論は、一面においては義和團に共通するところの、單に排外的獨尊的な愛國主義から生じたと考へらるべきものを有つてゐたであらう。併しながら、我國の尊王と中國の扶清とを同一視する孫文の見解は、兩國の國體の相違を全然省ることなく、ただ中國を以て我國を類推するにとどまる謬見であると云はなくてはならない。我國においては、中國では滅洋と扶清と結びついたのであつたのはちがつて、攘夷は倒幕と結びついたのであり、この兩つの運動をば我國の

分裂と崩壊とに導かずして、却つて相依つて國體の本質の顯現に資したところに、正に尊王論の意義があつた。尊王論は攘夷論と倒幕論とによつて拍車を加へられて我國民が自覺し、兩つの運動を一層深い根柢から支へ、積極的に國是としてそれらを指導した原理であつた。だからこそまた、攘夷論から開國論への飛躍的な國是の急轉換が、その根柢の上では、矛盾であつて且つ矛盾ではない、と云ふことが有りえたのである。中國の場合には、國是のこの急轉換を支へ、しかも國家の云はば自己同一性を、いな國體の明徴を、可能ならしめる原理は存在しなかつた、と云はなくてはならぬ。たしかに、孫文の云ふやうに、維新の成就と中國革命の不成功とは「時勢」に由來するところもなかつたわけではない。しかしそれは單に程度の問題であるにすぎず、質的な相違とは云へない。「時勢」に對處する民族の主體的構造の質的差異が決定的であつたのである。孫文の立場からは「維新の事業は全く西洋を師としたことによつて成就した」とのみ見られ、西洋文明を攝取した我國の主體的決意の場が攘夷でも倒幕そのものでもなく、それらを越えたところにあつた所以のものが見らるべくもなかつた。これは西洋文明がいだけ國家論のみによつて我國體を律しようとする彼のヨーロッパ的近代の知性を見る妄想であるにすぎない。その知性によれば、どの民族も専制君主政體より立憲君主政體の過渡期を経て、共和政體に赴くべきはずであつた。この推移は正に社會の進化を物語つてゐた。従つて明治維新における「朝氣」は全く封建制度の遺物としか考へられず、我國體の獨自性は全く認識されるに至つてゐないのである。ところで中國において、もし國家の治政よろしきを得てゐたならば、ヨーロッパにおけるよりも遙かに早く社會は市民社會化してゐたかも知れぬと云ふ碩學の主張がある（小島祐馬博士「古代支那研究」三三三頁參照）。また中國の自然や生活様式が、我

國と比較する場合には、ヨーロッパに一層近いとは、多くの人の賛同するところである。してみれば、孫文が維新を解するに、單に近代的ヨーロッパの知性を以つてしたにとどまらずして、その奥に中國人の心術があつて、その心術が知性のとげる認識に同意を與へてゐたのである、と云はなければならぬであらう。それゆゑに、彼の東洋人的自覺と呼ぶべきものは、結局、漢魂の自己反省にすぎずして、眞にヨーロッパに對立して遂げられるべき東洋人の汎東洋的場所の自覺と云ふことはできない。従つてまた、彼の中日聯繫論は、その限りにおいて抽象的な自國中心的なものであることも、おのづと了解するところであらう。

次にわれわれは孫文の洋才の分析に移らう。しばしば記したやうに、孫文は社會進化論の信徒であつた。さうしてこの理論は本來、近世のヨーロッパの市民階級と、その必然的對抗者とを實踐擔當者とする進歩主義的歴史觀に基いてゐる。ここで進歩主義的歴史觀について詳しく論ずるいとまはない（之については拙著『經濟學と歴史意識』に收められてゐる論文を参照）。しかし、孫文の洋才をば分析するために、この歴史觀を生んだ近世の社會の本質的特色をば、次に簡単に指摘しておくべきであると思ふ。

孫文が觸れたヨーロッパの社會や社會思想は、民族革命をそれぞれの形で遂げて安定した近代國家が他の國家との間に新しい對立を生んだ十九世紀の國民主義時代の社會であり、またそこに生れた思想であつた。安定した近代國家と云つても、その内部に矛盾を有たなかつたわけではない。國內の安定の中に動搖を含み、國際的な動搖の中に新しい安定を求めて動いてゐた。この安定と動搖との交錯した姿をここで原理的に追求することはできないが（之については『東亞人文學報』第三卷、第三號誌上の拙稿「孫文の民族主義」を参照）、十九世紀の國民主義時代

の社會と社會思想との一般的特色は次の點にあると云つてよいのではあるまいか。近代國家の統一性と自己矛盾的に結びついてゐる市民社會の分裂性は、類型的には、社會を次の形態のものにする。——社會の主體は最小の單位である個人となり、社會は分化ないし分裂した個人の集合となり、その集合は個人の自由や利益に基いて偶然的な相互聯關となつて現れる。その偶然的な相互聯關をして本質必然的なものたらしめるものは民族の自己形成力すなはち國家の統一的權力であるが、このものは民族國家形成にあつて姿を現した「國家の理性」そのものではなくつて、自然法的に再編成された市民的國家權力になつてゐる。この權力は市民社會の個人的主體を超越した「國家の理性」から直接に導き出されるものではなく、市民社會の相互聯關を通して、それによつて變容されたものとして、みづからを發動せしめる。市民社會の根基の上に國家權力が附隨的に加へられて、社會の統一が維持、發展せられようとするのである。ここでは分化ないし分裂が第一次的であり、統一は第二次的である。いま社會の分化の面に即して云へば、個人の相互聯關は、精神的な紐帶によつてではなく、物質的な謀介によつて生じ、物的媒介は慾望の對象であるから、個人的主體に對して廣く一般性を有つとともに、有限性を有つことを免れえない。慾望の對象である物的媒介が商品の個別的具體性から貨幣の一般的抽象性へと發展し、更に近世に特有の資本と云ふ高次の一般的抽象性を有つものになつて生成してゐるこの時期の社會では、巨大なる資本の媒介による社會の分化は、以前の時代には見ることでできなかつた包容性と分裂性を呼び起こす。個人は血や土地や身分や領土とは無關係に、高度に可動性を有つ資本によつて相互聯關を取り結ぶがゆゑに、社會は單純となり、包容性に富むとともに、資本への物的媒介の生成は一定の社會的條件を前提してのみ可能であり、従つ

て高度に有限的なものであるがゆゑに、資本によつて社會は前代に見られなかつた明瞭な階級分裂を現して來る。一國內部では、社會は、類型的には、資本の所有者と資本の下で從屬するところの勞働力——資本が資本としての機能を果たすのは之と結びつくことによつてのみである——の所有者とに階級的に分裂する。國家權力は市民社會のこの單純にして包括的な階級分裂を前提し、その分裂が民族の統一を破らぬ限りはそれを放置し、あるひはそれを促進さへもし、民族の統一を危くする限度に應じて後からその統一的努力を働かせる。ここでは國家權力も市民社會の利害から自由ではありえない。従つて權力そのものが資本の利益に追隨することにならざるをえないのである。このことからして、社會には國家權力をば望み、あるひはそれを自己の利益の追求のための手段として見るものと、國家權力の發動をば自己の利益に對する桎梏と感じなければならぬものとの分裂と云ふ事態を結果するのである。従つてまた、社會思想から云つても、社會の分裂をば以前の時代より一層合理的としてそれを謳歌する資本家的な思想と、それに對抗することにこそ社會の合理化は望みえられるとなす社會主義的な思想とが、對立的に生じて來るのである。

この社會的および社會思想的對立は、近世社會の構造から云へば、論理的にも歴史的にも同時に生じたと云はなくてはならない。それらはいづれも近世に個有な、また必然的な双生兒であるからである。しかしながら、それらが社會において現實的な勢力を獲得するには時間的な間隔を有つてゐたと云はなくてはならぬ。なぜなら、資本はおのづと生ずるものではなく、一定の社會的條件の下で自覺的に發生、蓄積されるものであるに反して、勞働力は一定の社會的條件の下ではおのづと造出され、且つ資本に從屬する勞働力には、近世特有の單純化と機

械化とが可能であつて自覺性を伴ふことが尠いから、資本家階級の自覺は労働者階級の自覺よりも先立つものだからである。すなはち、資本家的な思想は近世社會におけるテーゼとして最初に現れ、社會主義的な思想はそれに對立するアンテーゼとして遅れて現れる。従つて一層明瞭に云へば、二つの思想が社會的な力として出現するには時間的な前後があると云ふべきである。更にこの時間的なおくれは、民族的な相違とともに、間隔を異にする。大まかに云へば、時間的に早く近世社會に入つたところでは、資本家階級が社會的勢力を占め社會思想を普及せしめてから、直接生産者とその對立物として登場し、社會主義思想を武器としはじめるまでには、比較的長い間隔があり（たとへばイギリス）、近世社會に入ることのおくれたところではその間隔が短かい（たとへばドイツ）と云つてよいであらう。それゆゑに、資本主義的な思想と社會主義的な思想は、本來ヨーロッパ的近世の社會における、論理的には同時的な二つの思想なのであるけれども、その社會的な地歩を占める點に關して云へば、時間的な前後があるにとどまらず、更に異質的な時代を代表する二つの思想であるかの如くに見えて來るのである。このことは近世の社會思想史を辿る上に極めて重要な注意事項ではないかと思はれる。

この事態は、進歩主義的歴史觀と結びつくことによつて、次のやうな思想を生んだ。ブルジョワジーは、社會が近世國家内部の市民社會の成熟とともに飛躍的に進歩したのであり、のみならず、近世國家の埒内にあることによつて、社會は更に無限に進歩するはずである、と考へた。之に反して、社會主義的思想は、近世國家の權力の制約を受けない無限的な社會の擴がり——之は近世社會の分化に本質必然的な一つの契機である——に向つて行くところこそ、未來の社會進歩があると思つたのである。ここに國民主義と世界主義との對立がある。孫

文の接觸した社會思想はこの對立を有つてゐた。さうして社會主義者は、資本主義から社會主義に移ることが、近代の社會から次の新しい時代に進歩することである、と考へたのであり、この思想をば孫文は素直に承認したのである。

たしかにアンティテーゼはテーゼの後に現れ、その内容から云つても、テーゼよりも具體的な思想を含んでゐる、と云ふことも一面ではできはする。しかしながら、アンティテーゼがアンティテーゼとして存立を有つのは、實はテーゼの存立を豫想し、それに本質的に依存しつつ對立するからなのであつて、それはテーゼとば獨立に自己充足的な存在と云ふことはできない。従つて又、それはいつでもテーゼに逆轉する可能性を本質的に含んでゐる。アンティテーゼと考へられるものが實はテーゼの新しい形にすぎない、と云はれえもするのである。資本主義と社會主義との關係についてもこの事が云ひえられる。社會主義は資本主義よりも一面においては具體的な思想であると云ひうべきものを有ち、資本主義から社會主義へ移ることは一つの進歩であるとも考へるのであるけれども、社會主義が進歩だと云へるのは本來資本主義に對抗すると云ふ側面からだけであり、實は資本主義に本質的に依存してゐるのであつて、それゆゑ、社會主義がやがて新しい資本主義に轉化する可能性を孕んでゐるのである。我國で所謂左翼の轉向者と云はれる人々の思想の轉向の中に、ひとはこの事實を指摘できないであらうか。兩つの思想はともに近世社會の場を共通にし、同じ次元に立つてゐる二つの對立物なのである。しかしながら、この次元を越えたところにこそ、眞に近世社會を越えた社會の社會組織が構想されなくてはならず、それこそがまことの社會の進歩を齎す思想であるはずであらう。

資本主義と社會主義との對立は、本來ヨーロッパで生じたものではある。けれどもヨーロッパの近世は單に近世一般のヨーロッパ的な形と云ふよりも、むしろ世界史の近世そのものと云ひうべき理由がある。それはヨーロッパ的であつて且つ世界的なのである。従つて資本主義も社會主義も共にヨーロッパの社會についてのみ云ひうるのではなくして、世界史の近世一般について妥當するものである。東洋諸國の近世も、そこで類型的にはこのヨーロッパ的起源をもつ社會組織や社會思想で以て特徴づけられるべき理由がある。我國の維新後の驚異的な發展はその發展をあらしめた主體的原理は我國に個有な無比の國體より發するものであつたが、經濟・政治・文化の形を類型的に云へば、ヨーロッパ的の近世におけるそれらによつて可能となつたのである。ヨーロッパ的の近世の社會制度や社會思想が近世一般を代表してをればこそ、我國はかくて世界史の近世に一の構成員として登場することができたのである。我國がこの近世的な形を取ることによつて眞に我國體の精華を發輝しえたか、あるひは逆に我國體の明徴に缺くるところがあつたか、と云ふことは、現代の我國民に自覺することを迫り、新しい社會の形の創造に挺身することを課してゐる問題であつて、今ここで立入つて論すべきものではない。けれども世界史的な近世とは結局、ここに述べ來たつた如き社會なのである。同じことは中國についても云ふことができる。孫文が中國民族の近世國家形成と云ふ革命的意慾に燃えたとき、傳統的な支那思想によつてではなく、ヨーロッパの近世の社會思想の洗禮を経ることによつてはじめて、その意慾を遂げる指導理論を構成しえたこと、以上に述べ來たつたやうな理由に基いてゐる。さうしてヨーロッパの市民革命がその革命の實際的擔當者すなはち主體を民族内部に見出すことができたに反して、中國においてはそれが發見されえなかつたところに、中國革命を

特色づける所以のものが見られなくてはならない。ともかくもこのやうにして孫文は、ヘンリー・ジョージの思想とビスマルクの政策と云ふヨーロッパ的なものを模倣する民主主義を構想することによつて、中國の近代革命の一原理とすることができたのである。

がそこにあたかも彼の洋才の本質が横はつてゐる。この本質は嚴密に云へば二重の構造を有つてゐると云はなくてはならぬ。第一には、先に語つたやうに、孫文は中國の地において資本主義をして社會主義を創造せしめようと意圖した。その際彼がその過程が社會の進化を示してゐると考へたことは云ふまでもない。之は彼がヨーロッパの社會思想をそのままに受け容れたと云ふことを如實に示してゐると云つてよい。だがわれわれが見たやうに、孫文は晩年に至つていよいよ明瞭に資本主義と社會主義との間を、ブルジョア民主主義とプロレタリア民主主義との二つの極の間を動搖してゐた。さうしてこの動搖を彼みづから自覺してゐないかのやうに見える。がわれわれにとつては、この動搖こそが問題である。さうして之が彼の洋才の本質を第二に特色づけるものであるのである。彼が二つの思想極の間を動搖してゐたことの理由は、中國においては資本主義に必要な物的および社會的條件が一つも存在してゐなかつたことに基いてゐる。資本主義は、したがつてその對立物である社會主義は、單にヨーロッパにのみ實在して、孫文にとつてはただイデオロギーとして意識されてゐたにすぎない。だから彼が中國において國民經濟を建設しようとした場合には、中國に内在する實在的な物的および社會的條件と結びついて資本主義化に乗り出すことができずに、却つて資本主義社會の矛盾が觀念的に先取された。そこから彼は資本主義の極を離れて社會主義の反極に移つてゆく。だが社會主義の實現は實は資本主義的な諸條件を前

提し、それに依存するものであること前述のごとくであるからして、社會主義實現の諸條件を獲得するために、却つて再び資本主義實現へと歸つてゆかねばならぬ。反極はまた元の極へ移行することを命ずるのである。しかし元の極へ歸還しても、中國の現實との結びつきは依然として不可能である。それゆゑ、極から反極への移行は新しく始められねばならぬ。このやうにして孫文の洋才は極と反極との間を繰返し動搖したのである。この動搖は終ることなき觀念的動搖である。さうしてそれは孫文の知性の敗北を意味してゐるのでなければならぬ。われわれにとつては、しかし、この動搖こそは近世社會に本質的なものであることが了解せられるのである。孫文の知性は敗北を喫したが、しかしその敗北はヨーロッパ的知性そのものの敗北を體驗しえたものではなかつたであらうか。ヨーロッパ人の知性は、資本主義がヨーロッパにおいて實在的であつたがゆゑに、資本主義と社會主義との近世社會の埒内における相互移行と云ふことは理解せられず、前者から後者への移行が時代を異にする原理への轉換のやうに思へたのであつたらう。ここにヨーロッパ人の知性の、われわれから見ると、抽象性があるのではないであらうか。さうしてこの抽象性を脱却して、資本主義と社會主義とを近世に固有な對立し合ひまた同時に依存し合ふ二つの思想であると見て、それらを共に越えた第三の立場から兩者の本質をとらへうるところに、東洋人にしてはじめて可能であり、且つ兩つの思想の眞相に徹しうるところの思想の獲得が期待されてよいのではないであらうか。このやうな立場に立ちえなかつたところに、孫文の知性の洋才たる所以があるとわたくしには思はれるのである。

三

孫文の漢魂と洋才とは以上のやうな本質を有つてゐた。次にしからばそれらはいかにして孫文の意識において

結びつくことができたのであるか。漢魂と洋才とは本來結びつかない。なぜなら、漢魂は漢才と結びついて傳統的な支那思想を形成してをり、洋才は洋魂と結びついてヨーロッパの思想を形成してゐるのであるが、東洋と西洋とは十九世紀の中葉までは本質的に隔離されてゐたからである。洋魂と洋才とはそれまでに宣教師や留學生によつて中國に紹介されてゐたと云ふ事實はある。しかし、中國とヨーロッパとが政治的に積極的な交渉を有つに至らぬ間は、實踐的社會的な思想の上で、東西の思想の衝突、すなはち對質は知りえやうがなかつたのである。

ヨーロッパ列強の中國侵略は、中國人の漢魂を呼び覺ましたであらう。或は當時の政權擁護の立場から、或はそれに對抗する立場から、漢魂はヨーロッパ的なものと結びつかうとしはじめた。李鴻章の富國強兵策は前者を、太平天國の亂は後者を示してゐるであらう。だがそれらはいづれも不純な結合と云ふ外はなく、従つて所期の實踐的目標に到達しえなかつた。清朝末期の諸學者におけるヨーロッパの思想の吸收も亦、この結合の不純さを示してゐるであらう。ところで孫文に至つて、この結合は新しい形を取つて現れたのである。

孫文においては、洋才との接觸はその底に流れる洋魂の認識にまで達しうるものであつた。彼はアメリカやヨーロッパにあつて祖國の現狀に激しい嫌惡を感じつつ、洞察しえた限りの洋魂によつて漢魂を一度びは否定することができた。さうして漢才をも、洋魂に基礎づけられた洋才によつて否定することができた。この中國に傳統的なもの否定の上で、近代ヨーロッパ的な思想を横から持込まうとしたところに彼の革命意欲があつたのであり、そこに彼の革命と革命理論とを、中國における劃期的な近代革命とし近代革命の第一次的指導理論たらしめた所以のものがあるのである。

けれども彼が洋才の底に洞察しえた洋魂は、先に分析しえた通り、社會進化論と云ふ歴史哲學であり、それを

ばその真相においてではなく、ヨーロッパにおいて宣傳されてゐたままに、それを盲信し、それを直ちに中國に移し植ゑようとしたがゆゑに、困難が起つたのである。すなはち、社會進化論に基礎づけられたヨーロッパの社會思想が近世社會本來の分裂性と鬭争性とを陰蔽してゐると云ふ事態を見抜きえなかつた彼は、中國における資本主義經濟の建設にあつては、ヨーロッパ列強は援助の手を差しのべるであらうことを信じ、更に資本主義がやがて社會主義の夢をば實現するであらう、と輕々しく信ずることができたのであつたが、現實は彼のこの希望を無慘にも裏切つたのであつた。その時、一度びは否定された漢魂は彼によみ返つて來た。さうして彼は、洋才と漢魂とを結びつけて、民生主義によつて結局大同世界が實現すると公言してはばからなくなるに至つたのである。

これが孫文における漢魂と洋才との結合の真相である。彼が漢魂を一度びは否定しえたところに民生主義思想の近代性があり、従つて中國の近代革命の指導理論としてはじめて中國民衆を革命意慾に驅り立てることができたのであるとともに、單なる漢魂の否定と洋才への盲従とのみによつては中國の近代革命は成就されえなかつたし、また成就されるものではなく、むしろ一度びは否定された漢魂が再び起つて洋才の根柢となり、その上に洋才を載せたとき、孫文の意識の上では民生主義理論は整合的なものであつたけれども、現實的には、ブルジョワ民生主義とプロレタリア民主主義との兩極への終しなき彷徨となり、中國革命は外面的な統一戰線の中に、無限の分裂の内面性を培ひつつ、現在に至つてゐるのである。ここに民生主義の歴史的、現實的な意義がある、と結論を下すことができるのではあるまいか。さうしてこの結論は同時に、民生主義の對策の道を切り開くことを、われわれの認識に督促するものでなくてはならない。しかしながら、われわれの發展史的研究の貧しい結論からつながつて起るこの新しい論題について筆を進めることは、ここでの問題ではない。

京都帝國大學經濟學部内

「東亞經濟研究所」要項(昭和十五年十一月十日設立)

- 一、東亞經濟研究所ハ東亞經濟ニ關スル研究ヲナスヲ以テ目的トス
- 二、東亞經濟研究所ノ事務所ハ京都帝國大學經濟學部内ニ之ヲ置ク
- 三、東亞經濟研究所ハ左ノ事業ヲ行フ
 - 一、研究雜誌『東亞經濟論叢』ノ發行
 - 二、研究叢書『東亞經濟叢書』ノ發行
 - 三、研究報告 研究例會及研究大會ノ開催
 - 四、研究受託 特殊問題ニ關スル外部ヨリノ研究受託
- 四、其他當所ノ目的ヲ達スルニ必要ナル事業
 - 一、東亞經濟研究所ニ左ノ役員ヲ置ク
 - 二、評議員 經濟學部長ノ當ル
 - 三、編輯委員 評議員會ニ於テ互選ス
 - 四、會計委員 評議員會ニ於テ互選ス
 - 五、東亞經濟研究所ニ研究員ヲ置ク事ヲ得
 - 二、東亞經濟研究所ノ資産及會計ノ決定ニ依ル
 - 三、京都帝國大學經濟學會ヨリ受ケタル寄附金ヲ以テ基本財産トス
 - 四、基本財産及事業ヨリ生スル收入並ニ委託研究費ヲ以テ經費ヲ支辨ス
 - 五、會計年度ノ剩餘金ハ之ヲ基本金ニ繰入ル、モノトス
 - 六、役員ハ總テ無給トス
 - 七、承認ヲ經ルモノトス
 - 八、毎年度ノ豫算及決算ハ評議員會ニ報告シテ其ノ承認ヲ經ルモノトス

本誌の購讀會員(一ケ年分金參圓五拾錢)は東亞經濟研究所(振替口座京都一九六七四番)へ申込まれたし

昭和二十年三月二十五日印刷
昭和二十年三月三十日發行
特別行爲稅相當額 六錢
合計 金貳圓五拾六錢

編輯兼 松尾哲彦
 發行人 橋本岩太郎
 印刷所 眞美印刷所
京都市上京區上極木町通千本東入
(西京一九〇)

發行所 京都帝國大學經濟學部内
 東亞經濟研究所
振替口座京都一九六七四番
會員番號二二五五一九號
 配給元 日本出版配給株式會社
東京都神田區淺草橋三丁目九番地
電話九段(33)一〇〇三三
振替口座東京三〇三二七〇番

廣告料	賣價
一頁 金二十五圓	一冊定價 金壹圓
半頁 金十五圓	特別行爲稅 金六錢
四半頁 金九圓	相當額 金壹圓六錢
	送料 金十二錢
	一ケ年分四冊定價 金四圓
	(但シ特別行爲稅及送料ハ別ニ申受ク)
	(増大號ノ場合ハ此ノ額ニ非ラズ)
	(廣告料ハ前金ニ願フ。税金ハ別ニ申受ク)